

補助金のはなし

スポーツ振興課からの補助金のシステム、特に現役の方むけに説明しておきたいです。

各課が来年度の予算を立案するのは秋。年開けから議会が始まり、承認が2月頃。4月から、各課が承認された予算を執行できることになります。

一方ワンゲルの執行学年の交代は4月。4月に年間計画を立てて、「今年は小屋作業をやる」と言っても、そこで意志表示をしたって補助金は下りてこないのです。

遡ること2年前。37期のみなさんにお伺いして、高三郎の登山道補修への補助金を申請しました。もちろん補助金がおりてきたのは翌年の事で、執行学年は交代してしまっておりました。世話をしあげたつもりなのか何か歯車が噛み合わない。4年生になったらほとんど部活に顔を出さないとされるにもかかわらず、就職の決まった37期生4人が作業に参加してくれたのは、返事をした代の責任感だったのでしょうか。

そうやって無事補助金の30万円は現役の手に渡りました。部誌BHはOBカンパで賄われ、30万円は丸々残せることになりました。

さてこれで「登山道修復＝ワンゲルならではのアルバイト」が認識してもらえたか？昨年よりは歯車の噛み合わない思いが解消できたか？というところ…これが何となく。

つまり、現役の皆さんにすれば、来春自分がワンゲル部員であるかどうかともわからないのに、

早々と補助金の申請は行われ、自分の懐に入る訳でもないのゾルマだけが前面に出てきてしまう。どうせやるなら、ボランティアではなく、補助金を獲得できるようにというOBの親切心が、流動的立場の現役の思いとは噛み合っていない感じを受けるのです。補助金をもらうなら先回り…それがかえって「干渉」とも受けとめられる…歯痒くもあれば、悲しくもあります。

こうなると悟るしかありません。そうやって先が見えないのが「現役」という立場なのです。現役だけがやれば、ボランティアで終わるしかない登山道修復作業を、同じことをやっても身入のあるものにしてあげられるのがOBの存在なのです。

補助金というものの、報告をきちんとやれば次回からは楽になり、これを重ねればある種の既得権。よほどのドジをやらない限り、問題無しで継続が可能かと思えます。

その意味ではかつてのワンゲル道のようなその年度だけの道作りバイトと違い、重点整備箇所を何年かで一巡と計画していけば、継続して受け取れるといった高三郎様様のおいしい話なのです。

こんなおいしい話をさらにおいしくするのは方法論。新トレ偵察時にちょっと整備の時間を加える。新トレも、鋸を1本しのばせて、刈り払ってくる。秋は土日の2日間として、一日目早立ちで作業し、夜はBHで大宴会をして帰ってくる…それで延べ60人は容易に計上できるかと思えます。

毎年30万円！遭難対策金にもなるし、先立つものがあれば、こんなことをやりたいって夢だって湧くじゃありませんか！

「来年も。もちろん議会を通してからということですが」とのお返事をいただいています。今年よりもっとおいしく、作業をやってみませんか！

(舟田 節子)



9月21日から3連休となっていた私は、小屋酒場後、できれば白山中宮道を下ってみたいと思っていた。田村先輩の

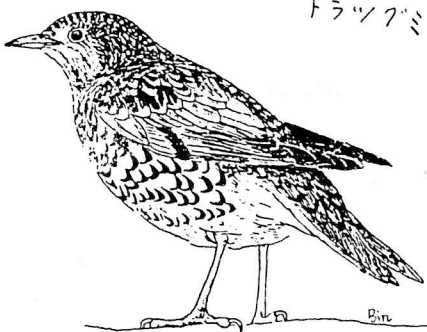
「24日まで暇だなあ」（福井工大にて、先輩が師匠と崇める綾井氏の講演が24日午後にある為）とのお言葉を耳にし、白山行きにお誘いした所、即「行く」とのお返事を頂いた。私はそのつもりでの支度をダムに残してきた車に用意してあったが、田村先輩は先輩でBHの標高が二千mばかり高くなるだけのことであり、あとは食糧だけと昼食の残りご飯にシソの粉をまぶしコップフルに詰め込まれた。

ダムから一路別当出合をめざし、夕方5時半には再び登山靴の身になった。

（編者蛇足…これも、「白山-BHパーワン」と言えそうですね。打っていて気付きました）立派な中飯場のトイレに田村さんが消えてから10分余り。心配になって見に行こうとした時、出ておいでた。すっかり暗くなってきたが、それでも何組かの下山者と擦れ違った。

今晚の宿甚ノ助に着いたと勘違いされた田村さんは、もう少し上に新避難小屋が建て直された事を知り、ガックリと力を落とされたようであった。それでも気を取り直し、甚ノ助小屋までたどり着いた田村さんは、濡れた服を着替え熱いスープを飲んただけで寝てしまわれた。

（ベルクハイムからの帰り、沢で足を滑らせ、下半身を濡らしてしまわれ、かなり体調が悪かったようである。）



トラツグミ

翌朝は千振尾根避難小屋が見えていたが、次第に雲に隠れてしまった。幸い田村さんは体調を回復されたようで、シソご飯とスープの朝食を取られた。

室堂を過ぎ、裏(?)からの剣カ峰、大汝やお花松原に感激しながら順調に進み、2349P付近で昼食。またもやシソご飯とスープの昼食を済ませて、田村さんは「食器をゆすぐ」と称して、梅酒のCCレモン割をゴクリ。「こっちの食器も」ともう一杯ゴクリ。それから30分程でキジ打ち休憩。原因は酒ではなく、食べ過ぎらしい。時折降る雨の中を、ゴマ平避難小屋まで「腹筋」と「肛門括約筋」の微妙なバランスを取りながら歩かれたのだそうだ。

夕食後は、梅酒のCCレモン割を飲みながら、田村さんのいろいろなお話を伺うことができた。湿った1980円のシュラフは寒く、目が覚めてしまったので、敷いていた薄い銀マットを筒状にしてシュラフの中に入れた。初めは暖かくて良かったのだが、汗で蒸れてしまいやがて寒く感じたが、そのまま朝まで寝た。

最終日も時折雨の降る天気だったが、次第に回復に向かう中、順調に中宮温泉へ下りた。

紅葉にはまだ少し早かったが、中宮道に入ってから誰一人として出会わない静かな素敵な道だったし、田村さんのお蔭で心細い思いをしなくてすみ、楽しい山旅であった。

（編者蛇足…田村さんは24日朝お元気な顔を見せて下さいました。

「いやあ、食当たりで吉田君にはたいへんな迷惑をかけてしまった。もうこりごりだと思っているだろうな。謝っておいてくれ。」

食当たりの原因は、あのあやしげな桑の実酒だろうと、私は想像していますけれど…)

金沢
山間部

ニホンザルの生息調査へ



昨年12月に群れによる猿害が確認された大根畑
＝金沢市熊走町

白山自然保護研究会

作物被害の拡大懸念

「タカサブロウ群」の数把握

白山自然保護研究会は今冬から、金沢市犀川ダム奥の高三郎山に生息するニホンザルの本格的な生息調査に乗り出す。昨年暮れに下流域で初めて群れによる農作物被害が確認されるなど猿害の拡大が懸念されており、同研究会は個体数や群れの数、白山地域のサルとの交流関係などを把握し、これまで不明だった「タカサブロウ群」の実態に迫りたいとしている。

100匹以上？予想超える繁殖

高三郎山は金沢市街の南南東二十四キロに位置し、標高一四二一メートル。白山地域では平成七年現在で二十四群、千八十六頭のニホンザルが確認されているが、白山山系につながる高三郎山の調査は手付かずのままだった。

犀川ダム近くの金沢市熊走地区では昨年十二月、二十四匹規模のサルの群れが出没し、大根やカボチャ、カキを食い散らす被害が出た。河内村以北で猿害が確認されたのは初めてであり、白山自然保護研究会は高三郎山のサルが予想を超えて繁殖し、行動範囲を広げているとみて初の生息調査を実施することにした。

現段階では百匹以上いると推定され、夏場には高三郎山の千ヶ峰前後、冬場に山つづみに下

りて生活しているとみられる。数年前には首に発信器をつけた白山地域のカムリA群のオスサルが犀川ダム付近で見つかり、白山のサルが金沢山間部まで足を延ばしていることが裏付けられている。

高三郎山周辺は急しゅんな谷があり、降雪期は立ち入ることが困難なため、研究会では十二月と残雪期に集中的な調査を実施する予定である。

研究会の滝沢均副会長は「流課専門員は二十十年の暖冬が繁殖を加速させた一因と考えられる。今後は医王山の調査も視野に入れ、猿害防止と保護に向けての基礎データを収集したい」と話している。

北の都の思い出

試験（そのⅡ）

0期 田村 昭夫

教養部留年中、法文学部の高島君（3期）の隣席で試験を受けたことがあった。

地学の問題で

「トンボロの意味を述べよ」

と云うのが出たので、私は高島君に教えを乞うた。人の良い彼は私の要望に応じてくれ、机の中から教科書を出して調べてくれていた。

突然、後方から教官が近づき、教科書と答案用紙は彼の手中のものになった。気の毒に高島君は即刻退場となった。

私は胸が痛んだ。彼が退学になったら、それは私の責任である。今年も留年と決まっていながら未練たらしく試験を受けたのは迂闊だった。友人まで巻き添えにしたとなっては…。彼の処分が決まる迄、祈るような気持ちだった。

幸い彼は、訓戒処分で済んだ。

以後私は、絶対にカンニングが出来ないように、自分を規制した。数年後、ようやく専門課程に進めたが、試験の時にはいつも孤立無援の席をとるようにしていた。中川君（6期）が相変わらず崖っ淵にいる私の為に「カンニング特等席」を用意してくれて、感謝しつつ丁寧に断りしていた。

それもうわべのことであったか、結局中川君には、卒業間際に化学工学科目の単位取得の為に大変な御尽力を賜ることになってしまった。北の都の学生生活にようやくピリオドが打てたのは、彼の御蔭なのである。

北の都の思い出

試験（そのⅢ）

昭和37年。大学8年生の私は、夏休み中に教養部の物理、数学、科学の追試を受けて単位を獲得る為に、ワンゲル部屋に泊まり込み、背水の

陣を敷いていた。秋に専門課程に進めなかったら、退学余儀無し。絶体絶命のピンチに立たされていたのである。

そんな私の為に、教養部教務課の川崎課長は、物理、数学、科学の教官達に頼んで追試の手続きをとってくれた。お蔭でめでたく滑り込みセーフとなった訳で、川崎さんには大変恩義を感じている。今どうされているか？お元気で居られれば80歳頃だろうか？

こんな思い出の為に、私はつい最近迄よく試験の夢を見たものである。この時の圧迫感が大脳皮質深く刻まれた証拠であろう。昨年山小屋で、現役部員の一人が夢を見て泣いていたが、ひょっとして彼も試験の悪夢に取りつかれた気の毒な犠牲者だったのかもしれない。

もし学生生活に試験がなかったとしたら、何と素晴らしいことか。ちなみに、旧制の横浜高等工業では三無主義と称し、無試験、無落第、無賞罰を校是としていた。学生達は伸び伸びと学んでいたと云う。

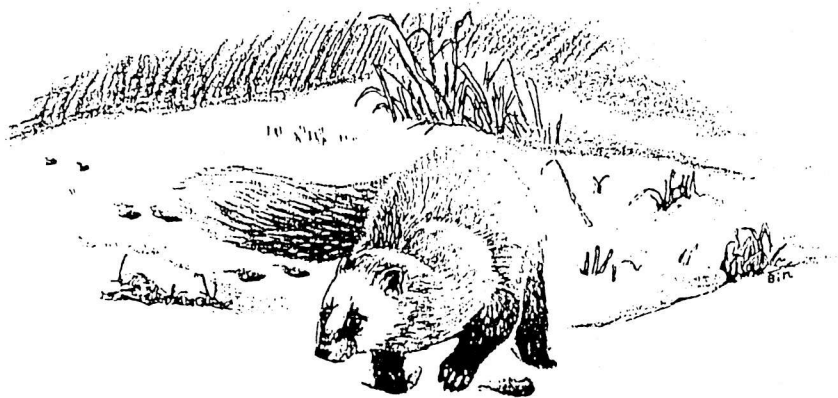
強制された勉強より、自主的の学問の方が実りのある結果を生む。大学人に再考を求める。

中高年登山

先日金沢からの帰途、新津から乗った磐越西線の車中で、九州から会津の山々に登りに来た4人のベテラン登山家達に出会った。

69歳を最年長に、62歳が最年少。そこに61歳の私が話に加わったのだから、盛り上がりは御想像いただきたい。彼等は博多の山岳会に所属していて、うち3人は20代から登山を続け、あとの1人が停年になってから加わったと云う。国内の山は無論、海外の山も登っているそうだ。昨年はキリマンジャロへ行ったそうである。

中高年登山が盛んな昨今である。「やまざと」の読者諸君、過ぎ去った学生時代を過去のものとせず、現在に取り戻すことを提言する。



「山は足で登るものではなく、心で登るものだ」と、ある登山家は云った。日常生活や都会生活の為に山から足が遠のいて、つい億劫になっていないか。

そのような方々に云いたい。まず我等の故郷「ベルクハイム」に行ってみよう。そこには忘却した青春が今も息づいている。倉谷川の早瀬、高三郎への尾根道が諸君を迎えてくれる。そして昔の友の笑顔が。

華夷の弁

「世界の中心が自分である」とする思想が中国にある。これを華夷思想と云う。

金沢大学ワンダーフォーゲル部の巣「ベルクハイム」こそを世界革命運動の拠点とすべし。

第一歩は倉谷を桃源郷とすることからである。来年からは木炭の生産が開始されるはずである。サラリーマン稼業にドブプリ漬かった生き方から足を洗い、一緒に理想郷の建設に汗しようではないか。

40年前に、私がワングルの諸君に呼び掛けた言葉は

「自然を通して人間社会の有り方を学ぼう」だったと思う。社会生活を体験し、子育ても終えて、人生の実りの次期を迎えた今、また、新たな呼び掛けをしたい。

物があがり過ぎ、贅沢と便利さに慣れ切った私たちの生活、倫理感など地に落ちた政治・経済。行政、及び教育の制度疲労。社会全体が元気がない世紀末的様相を呈している。

ここで我々は、初心に帰って、動物の一種としての人間の、自然との関わり方を考えてみようではないか。一世紀前の日本人は、自然との共存に叡知を持って努めていた。そんな日本人が、西欧の科学技術を無批判に取り込み、先人達の智恵を無視してしまったツケが、今回ってきている。

「山河への畏敬の念を取り戻すべし」

常用と請負

表題は、私が土木作業員をやっていた時に覚えた言葉である。「常用」とは時間給であり、「請負」とは出来高払いである。

従って、両者間では作業員の働き方がまるで違う。「常用」の時には働いているようにみせかけ、時間稼ぎをやる。「請負」の時には気遣いのようになって仕事をする。優れた土木作業員は、うまくこの両者を演じ分ける。

ホワイトカラーのサラリーマンはさしづめ「常用」であろう。何十年も同じことをやっていれば、堂にいった「常用」作業員になる。

先日、私の従兄弟は53歳で逝った。内科小児科の開業医であったが、彼の生き方はまさに「請負」のそれであった。白骨になって判ったのであるが、骨髄は茶色に変色していた。隠坊の云うには薬を服用していた証拠の由。家族にも知られないように薬を飲みながら、自らの体をむち打ち、多くの患者達に名医と慕われた従兄弟の正体を知り、私は涙を禁じ得なかった。

人の生き方にも「常用」と「請負」がある。あなたはどちらの生き方を選ぶか。

主の十字架を負う者

11月2日夜NHK教育テレビで、3時間を越える小沢征爾指揮「バッハマタイ受難局」を見た。

イエスの役割のトーマス・クアストフに心を打たれた。彼はサリドマイドの犠牲者である。イエスがそうであったように、彼も又、十字架を背負わされている。人間の愚かさが被害をひき起こし、何の罪もない人を犠牲にしている。彼の歌うイエスの言葉は、彼自身の言葉でもあるに違いない。

私は朝方まで眠れなかった。深夜、私は自分の体がイエスの墓となり、私の体の中でイエスの甦りを心から祈った。

目覚めた時は「文化の日」の晴々とした朝だった。グラスのワインを一気に飲み干すと、体中に力が湧いてきて、今年末に歌う「第9」の歌詞が飛び出した。

Freudig, wie ein Held zum Siegen
Seid umschlungen, Millionen!
Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder-überm Sternenzelt
Muß ein lieber Vater wohnen-
Freude, schöner Götterfunken, Götterfunken.

スキーを教えてください

10年程前、かの有名なスキーヤー、トニー・ザイラーと、磐梯山麓のスキー場で滑ったことがある。

彼に会った時、付け焼刃のドイツ語で私は云った。

” Könnten Sie mir bitte das Skifahren
heibringen”

ザイラー氏は怪訝な顔をしている。もう一度云ってみたがおなじ。3度目は一語一語ゆっくりと発音した、しばらく考えていたザイラー氏は、ボンと膝を叩いて“beibringen”と答えてくれた。何のことはない。beibringen (教えるの意)をheibringen (?)と覚えてしまっていたのだ。

氏は私より1歳年上だが、二人は意気投合してゲレンデを滑りまくった。彼は私の古色蒼然とした竹ストックとスキーにいたく感心していた。

スキーが終わって、私が持参した日本酒を彼に勧めたが、

「私はスポーツマンだから酒は飲まない。」と云う。さすがオリンピックの三冠王は違うと今度は私が感心した。酒は彼と同行してきた三人のオーストリア人に飲まれてしまった。

いつの日か、彼の棲むキッツビュールのスキー場で、一緒に滑りたいものだ。

人間如何に死すべきか

学生の頃、私はもし宇宙の真理を発見したら、何時死んでも良いと思った。神の「光あれ!」と云う命令で出来たビッグバン宇宙の仕組みを知った今では、もう自分はどうなっても良いと思っている。

今日もイエスの血(赤ワイン)を飲み、エンヤのオリノコフローを聞きながら、晩秋の日差しを浴びている。残された日々を如何に生き、如何に演出するかを思う今日この頃である。

古代ギリシャのある哲人は、年とって石に躓いて転んだ時「大地よ、お前が呼ぶならすぐに行くよ」と毒薬を飲んで死んだという。また、ガンジス川の流れを見つめつつ、死を待っている人々が居ることも知っている。四国のお遍路をしながら人生の終焉を迎える方法もある。

死へのBGMにはモーツァルトのレクイエムがいい。贅沢で羨ましい死に方は「腹上死」であろう。これは望んでも成就できるとは限らない。理想的な死は、他人の為に命を捨てることである。これは価値ある死である。

私が最も嫌う最期は、病院で鼻にチューブを突っ込まれて半殺しにされることと、車に轢き殺されることだ。俺を轢き殺した奴には化けて出てやる。

逆駆出山門

禅の公案である。字面は、後ろ向きになって山門から駆け出すと云うことであるが、皆さんは如何に解くか。私は「山門」を大学の校門と考える。

私は「皆が行くなる大学という所に我も行かむとする也」と入った「学問の府」には見事に裏切られた。高校時代の延長のような講義。

唯一の救いは哲学という講義があったことである。鬼頭教授のテカルトの名句「我思う 故に我あり (Cogito ergo sum)」について述べよという一問だけの試験には、これこそ大学と思つたものだ。

後がなくなって、仕方なしに進んだ専門課程は、詰め込み授業。教授は二言目には「会社」を出す。何とか卒業して就職したら、今度は仕事の為のお勉強。

学問に場所を求めたことが間違いだったと悟つたのは、最近である。学問は門のある場所で学べない。自らに問いを發し、答えを探す。学問の府は自分自身である。大学は、学問とは無縁な所で、知識と手法の大店舗（スーパーマーケット）に過ぎない。

こんな場所からは逃げ出すに限る。しかし、自らに問い且つ考えたことを世間に問い掛ける場所として、大学を利用するのも便法ではある。

仕事と遊び

仕事と遊びの心は同一である。違うのは、仕事には収入が伴い、遊びには支出が伴う。

昔、高橋義孝と云う独文学者が「仕事とは神聖なる遊びである」と云った。神聖かどうかは知らぬが、仕事は遊びであることには間違いない。年金生活者になってつくづくそう思う。

会社で仕事をやっている時は本当に楽しかった。困難な仕事ほど面白かった。

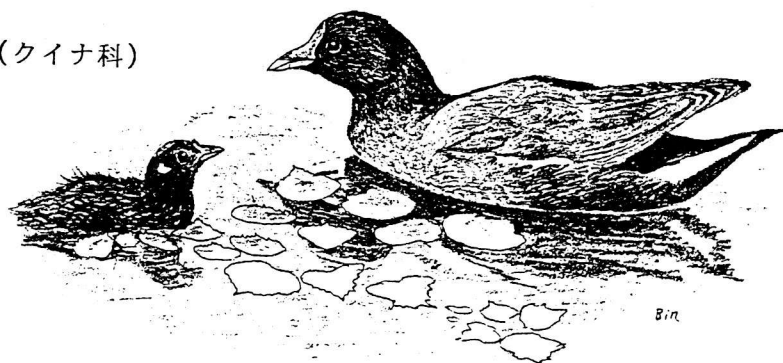
独立してやろうとした仕事には注文がとれず、止むなく廃業し、機械設備をそっくり山形大学工学部に寄付したが、仕事をやりたい気持ちは今も変わらない。

遊びも又楽しい。仕事と遊びの共通点は、どちらも創意工夫が必要だからだと思う。

今は年金がもらえるから生活に心配はないが、毎日が日曜日とは、かくも退屈なものとは思わなかった。だからこんな駄文を書いて暇つぶしをやっている。

一足先に停年を迎えた者は、これから停年を迎える諸君に云っておかねばなるまい。それは生涯を貫く仕事を持つことである。それは一人一人異なって当然である。好きで、楽しく、社会に貢献出来るのが仕事であり、報酬は充足感である。遊びには社会への貢献がない。従って虚しさだけが残る。

バン（クイナ科）



ドイツの作家ヘルマン・ヘッセは、ある日本人の読者への手紙に

「大きな計画を立ててはいけません (Nicht groß programm machen!)」

と書いている。

これを私は私自身への警告と受け取った。

「日本を改革する」だの、「世直しをするのは俺だ」等、最近の私の言動には、身の程知らずのものが多かった様に思う。教祖ぶった言い方を皆さんにしていたことを、深く反省する。申し訳ありませんでした。

高望みせず、自分の出来る範囲で一步步、理想の世を築くことが、私の生き方なのだと思う。日本の初代大統領になるのだなどと、たわけたことを云っていた自分が恥ずかしい。皆さんも私のような大言壮語は決して云わないでもらいたい。「云うは易く、行うは難し」。

だからといって、理想を無くして現実に流されることを良しとするのでは断じてない。自分の立場をしっかり見つめ、身近なことから改革していった欲しい。

炭酸ガスを排出しているのは自分である、自然を破壊しているのも自分である、という反省をもって欲しいのである。人々の意識が変わった時に初めて世界は変わる。

千ゴモズ



北の都の思い出 落第生

教養部8年生の私は、城内の植物園に寝転んでいた。空から白いものが落ちてきて、私の眼鏡が見えなくなった。正体はカラスの糞だった。カラスまで落第生の私を馬鹿にしている様で情けなかった。

井上靖の詩「流星」の中の一節

「私はいつまでも砂丘の上に横たはっていた。

自分こそ、やがて落ちてくるその星を
己か額に受け止める、

地上におけるただ一人の人間であることを、
私はいささかも疑はなかった。…」

と似た様で似ていない、あまりにの落差に一人涙する私だった。

次の日、郷里から父が出てきた。親父は大学を辞めて、家業を手伝えと云う。私が

「もう少し長い目で見てくれ」

と云ったら、カミナリが落ちた。

「これ以上長い目とは、どんな目を云うのだ。バカモノ！」と。

その夜は当時金沢駅前にあった「日の出旅館」で、一晩中親父の説教を喰った。

翌日、

「もしお前が退学することになったとしても、俺はお前が無能な男とはどうしても思えない」と云い残して、親父は帰っていった。私は信頼されている息子の幸せを感じながら、後ろ姿を見送った。

行って受け、帰って受けたカスタムショック

21期生 大野 直子

女子高生のスカートが異様に短い。制服なんだからそこまで短くしなくてもいいんじゃないの？ 第一、階段を昇る時、後ろの人は目のやり場に困っちゃうでしょ。しかもニョッキリ伸びた足にはみんな判で捺したようにダボダボの靴下を履いている。極太の毛糸で編んだ厚手のソックスは遠きワングル時代、先輩諸氏にチャムランへ連れて行って買って買ったものではないか…。はたまた、くるぶしからズリ落ちそうで落ちないその靴下の形相は、新雪をかき分けかき分けピークを目ざした冬山装備のスパッツにどことなく似ているではないか…。今から雪山に登る、いや、金沢城跡探検のためブッシュこぎに行くからね…というのなら、解る。でも春もうら街中を歩く女子高生がである。しかもみんな同じ、おんなじ格好をしているのであーる。

主人の仕事の関係でメキシコで暮らすこと3年。3年振りに日本という国を見て、なんかへん…絶対へん！ってということがいっぱいあったのだ。

カルチャーショックと言うほど大袈裟なものではないので、カスタム（習慣）ショックとでも言え方がいいのか…。時間が経てばいろんなことが変わるし、所変われば習慣変わるでそれは当然のことだが、「アレアレ？」という感覚は、ほとんど金沢を出たことのない私にとって新鮮なストレートパンチでもあった。つまり視点を変えることができた貴重な体験となったのである。

「Oh, no! セニョーラ（奥様） そんな重い物を持ちちゃ!」。同じマンションの住人が警備の人がサツと現れ、私の手から荷物を素早く持ち去り、部屋の入口までジェントルマンよろしく満面笑顔で運んでくれる。スペイン語だからよくは解らないけれど、そう言っているのだと思う。

メキシコ人はとっても愛想がいい。それにレディーファーストの国。マンションに住む人は通常メイドさんを雇っているし、奥様はスーパーへ買い物に行かない。行ったとしてもメイドさんや運転手さんが荷物を召し抱え、ふんぞり返って歩くだけ。私の場合、掃除を頼んでいたお手伝いさんはいたものの、和食店のわが家では、ご飯づくりや買い物は一切自分でやっていた。

ご存じメキシコは情勢不安の国、スーパーでピストル

強盗に会うことも決してまれではないため、回数を減らすためにまとめ買いをすることが多かった。タクシーはびっくりするくらい安いから使えばいいのだが、車という密室で二人きりになるのが怖くて、自ずとたくさんのスーパーの袋をぶら下げて歩くことになる。

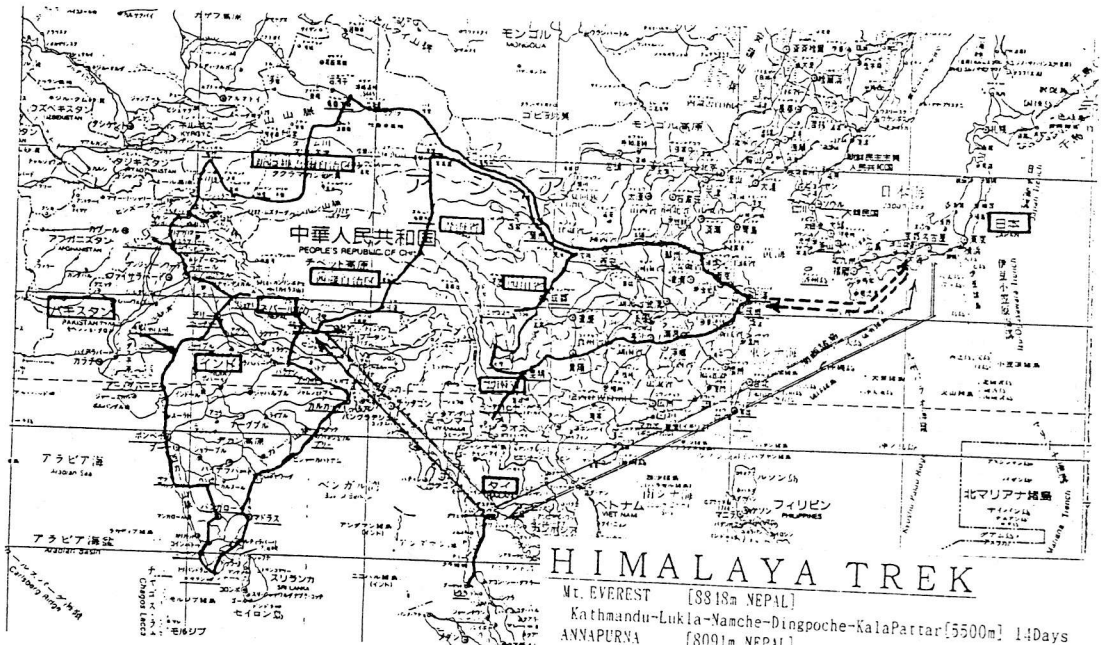
その結果起こるのが、このセニョーラ事件。向こうも親切心なのだから、グラシアス（ありがとう）で行為に甘んじればいいのだが、そうはいかない。ドアの前まで来たらポケットからお金（コイン）を出し、スッと手渡さなければならない。ところがバッグから財布をモゾモゾ探し出し、「5ペソじゃ少ないかしら…、重かったから10ペソぐらいかしら…」という具合で、決して外人がやるようにスマートにはいかない。そう、メキシコにはチップの習慣があったのだ。

メキシコで一番頭を悩ませたのはこの「チップ」だった。1億総中流の日本にはその習慣がないばかりか、独立独歩、他人のことは構わない日本人にとってチップは誰もが戸惑う習慣ではないだろうか。お金が欲しいから、じゃない。困っている人を見過ごせないラテンの熱き血がそうさせるのだ。私としても5ペソや10ペソのお金が惜しいわけではないが、「ほっといて！ ボッカで鍛えたこの身体、へっちゃらなんだから自由にさせて。どんな苦境にあっても冷たい視線しかくれなかった日本人が懐かしいー!!」、何度そう思ったことか…。

メキシコ人は道を歩いていて目が合うと、知人他人にかかわらずニコリ笑う。その習慣が良い悪いを問う以前に、日本ではそんな行為は存在しない。なぜって視線を合わせないことが習慣だから。

日本の常識が世界の非常識だったり、メキシコの常識が怒り心頭のこともあったり。わが身においてもまたしかり。いろいろなことを考えさせられたメキシコの3年間、帰ってからの半年間であった。

本当なら、主人が5300メートルのメキシコの山イスタシワトルに登ったことや、アラスカ、アメリカの国立公園を家族で周ったこと等を書くのが誌面にふさわしいのだろうが、戯言（ザレゴト）と思って読み流して下さい。メキシコでショックを受け、日本に帰ってからもショックを受けた、ダブルパンチのカスタムショックの、お話をした。



HIMALAYA TREK

- Mt. EVEREST [8848m NEPAL]
- Kathmandu-Lukla-Namche-Dingpoche-KalaPattar[5500m] 14Days
- ANNAPURNA [8091m NEPAL]
- Pokhara-BaseCamp[4100m]-Tatopani-Yukutinath[3800m] 21Days
- NANDA DEVI [7816m INDIA]
- Rishikesh-LataVillage-LataKharak[3900m] 5Days
- NANGA PARBAT [8126m PAKISTAN]
- Gilgit-Chorit-SouthFaceBaseCamp[3500m] 5Days
- DEOSAI PLATEAU[5000m PAKISTAN]
- Skardu-DeosaiPlateau-BurjiPass[4800m] 5Days
- KARAKORUM K2 [8611m PAKISTAN]
- Skardu-Baltoro-K2 B. C. [5100m]-GondoghorPass[5700m] 15Days

*深井 嘉浩 29期

前略、皆様お元気でしょうか？

私事ながら、先日、8ヶ月のアジア放浪旅行を終えて帰国いたしましたので、遅れ馳せながら、ご報告させていただきます。

(’96年12月-’97年7月 総費用は約70万円)

今回のルートは、タイ-ネパール-インド-パキスタン-中国[シルクロード-上海]の5ヶ国を巡ると共に、エベレスト、K2 etc.世界の屋根ヒマラヤの峰々をトレッキングして参りました。

これからどんな職に就くのか、未だ模索中の身ではございますが、アジアの人々から得た”ENERGY”を手土産に、また新しい生活を始めて行きますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

’97 夏

ps 毎度「やまざと」と「ベルクハイム」送付ありがとうございます。

OVER LAND ASIA

Stage 1 01/MAR /1988-21/JUN /1988

(金沢大学在学中)

神戸港-上海-雲南省-四川省-青海省-

西藏(チベット)-ネパール-バンコク-大阪AP

Stage 2 12/DEC /1996-28/JUL /1997

(今回)

名古屋AP-タイ(ビビ島)-ネパール-インド

-パキスタン-シルクロード-上海-神戸港



ジャマイカのリズムにのって

34期 飯村 雅子

私はこの度、お蔭様で2年間の青年海外協力隊としての任期を無事終え、8月に実家に帰ってることが出来ました。出発の際には温かいお励ましをいただき、本当にありがとうございました。みなさんの応援をいただければこそ、健康で充実した毎日を過ごせたのだと、心から感謝申し上げます。今回「ジャマイカでのことを何か」とお声を掛けていただきました。外国のことは皆さんのほうがよくご存じでしょうし、会報の趣旨から外れてしまうかもしれませんが、私の見た感じたジャマイカを少し御紹介いたします。

2年前の7月、中央アメリカのカリブ海、キューバやハイチ等の島々の南に位置する、秋田県とほぼ同じ面積の常夏の小さな島国ジャマイカに、私は養護の隊員として派遣されました。自分が行くことになるまではどこにあるのかさえも知らなかったのですが、レゲエとブルーマウンテンコーヒの故郷と言えましょう少しイメージが沸くでしょうか。大昔にこの地に住んでいたアラワクインディアンという言葉でザイマカ（木と水の大地）という意味を持つように、緑豊かな美しい国です。1494年にコロンブスに発見されてから様々な歴史を刻み、多彩な文化が融けあった国、今のジャマイカとなったのです。イギリスの植民地から独立したこの国には、現在250万人もの人が生活していますが、その80%近くはアフリカ系黒人で、英語を公用語としています。といっても現地ではパトワという言葉を使っており、言葉では大変苦労しました！

食事は、米、イモ類等を中心に、鶏・牛・山羊肉、魚など、主に砂糖や塩こしょうで味付けられており、様々な南国特有のフルーツが、食卓を彩ってくれました。ただ砂糖と油を非常に多く使うため糖尿病が多く、体格のよい女性がとてもたくさんいたのは考えさせられました。現役時代から重い身体ゆえに？よくバテていた私でさえも、十

分細いじゃないと錯覚してしまうくらいでした。

ジャマイカ人はとてもお洒落です。髪の毛のセットや凝った編み込みに時間もお金もかけ、Tシャツにしっかりとアイロンをかけるほど身だしなみに気を配ります。洋服もカラフルで派手なものを好み、自分好みの物をつくるための布屋さんやドレズメーカーが大はやりです。

住まいはお金持ちとそうでない人との違いが大きく様々ですが、ほとんどどんな家にもグリルという鉄格子のようなものが窓やドアにとりつけられており、カギもいくつも付けて治安に気を配っていました。また風通しをよくするためか、窓や玄関にはすき間があり、アリやくモ、蚊、とかげなどに悩まされたものです。

私の職場マッカム小児発達センターは、政治・経済・文化の中心地、首都のキングストンにあります。職員12名、6か月から7歳の障害児、健常児あわせて60名が通ってきています。この施設はジャマイカで唯一の統合保育通園施設で、健常児と障害を持った子供たちが共に生きる場をと、10年前に今の施設長によって建てられました。NGOで国からの援助がないため、経営的には苦しい状態が続いていますが、紙がない糊がないスプーンがない...と常に教師は嘆きながらも、ないときはあるもので工夫し、節約することを学びながら活動しています。私はここで、

- (1) 障害児の個別指導
- (2) 教師への障害児理解のための勉強・討論会
- (3) センターの移転建設に係わること
- (4) 教育環境の整備
- (5) 学校紹介のための記録

を行ってきました。2年間これらを進めていくに当たって、自分の英語の未熟さを痛感し文化習慣の違いに時にはついていけず、怒ったり泣いたりすることもありました。しかしいま振り返るとうれしかったこと、楽しかったことばかりが思い出されます。その中でも2年間で最高にうれしかった出来事を2つ、紹介したいと思います。

1年間私が指導してきた自閉症の5歳の男の子K君が、突然口を切ったかのように話しはじめた

のです。最初の半年は「Water」をやっとただ一言使うのみで、他には何一つしゃべらず、あの手この手を使っての私の日々の挑戦が、続いていたのですが、今では身の回りのもの、自分の体の部分の名称について興味を示し、指さししながら呼称できるようになりました。ものに言葉があること、人と意思を通わせることの喜びを知ったようでした。親も職員も「言葉のでなかったK君が。」と大喜びで、私も個人差はあっても子供たちの発達の歩みを応援していける、この仕事をしていて本当に良かったと改めて思いました。そして日本でもジャマイカでも、言葉は違ってもうれしい気持ちは共有できることを実感しました。

75万人もの人口を抱えるキングストンは、治安においては世界各国でも有名な大変危険と言われる街で、毎日事件は絶えず、貧富の差がこの国の大きな問題ともなっているようです。そのため比較的安全な地域にあった職場さえも、私がいるあいだに5回以上も泥棒に入られ、その度にドアやグリルさえも壊され雨漏りなど老朽化も目立ってきました。学費の値上げをしたり、毎月1回鶏肉と揚げパンの入った手作りのお弁当を販売したり、個人や企業に資金援助、募金などをお願いして、資金を集めながら新しい場所に移転するため工事を進めていました。しかし工事は遅々として進まず、障害児のことを真に考えたセンターでありながら、資金の不足から、そのためのセラピールームにまでとても手が回らない状況でした。この上は日本のみなさんに何とか助けてもらえないだろうかと、の所長さんのお言葉に思い余って、小さなハートプロジェクトの申請をしたところ、地元石川県を中心に支援の輪が広がっているとのうれしい報告をいただくことが出来ました。小学生からお年寄りの方までの、みなさんの温かいお心のこもった募金のお蔭で、建物は無事完成し、ジャマイカのみんなの喜びいっぱいの最高の笑顔を見ることができて、私にとってもこれ以上の最高の幸せはありません。

思えばもしワングルにご縁がなかったら、私は協力隊で海外に行くことはなっていなかったか

もしれません。ワングルで山に自然に、人のあたたかさに触れたことがきっかけとなり、ヒマラヤの山々とそこで生活する人々に会いに行きたくなったのが、大学を卒業する春でした。そこで貧しいながら輝く目で生きている人たちに会い、お客さんではない立場で何かがしたいと思ったのが始まりです。残念ながらネパールではなかったけれど、ブルーマウンテンというコーヒーの山(約2500M)に登れる島国、ジャマイカが第二の故郷になったのです。

この2年間、協力隊員として少しでも現地の人達のお役に立ちたいと思って、活動してきた私でしたが、たいへん陽気で世話好きな彼らに助けてもらったこと、教えられたことのほうが、多かったように思います。この貴重な経験を、単なる良い思い出で終わってしまうのではなく、自分にとってそしてジャマイカにとっても、これからも形を変えながらもずっとかかわり合っていけるもの同士でいたいと、心から思っています。

2年振りに帰国となり、帰路途中に2年分の山への欲求が爆発してアフリカのキリマンジャロへ登ってきました。同じくコーヒーの山ですが、登り慣れたブルマンの2倍以上の高度に、体力の衰えを痛感させられました。

現在はお礼行脚に小中学校を回るなど、活動の残務整理をしていますが、社会復帰に向けてそろそろ動きだしははじめなければならないと思う今日この頃です。2年前まではまだ大丈夫と定職のない私を安心させてくれていた、同期やその前後のワングルの仲間たちも気がつけばしっかり職を持ち、何人かは幸せな家庭まで持ち私を焦らせてくれます。とはいえ、お互い何年もあってもなくても、久しぶりの手紙や電話でそのブランクを埋められる変わらないワングルの仲間たちに、安心感を覚えるのはなぜでしょう。たくさんの人と大自然の恵みに生かされていることを、改めてうれしく思います。

OB会を運営してくださっている皆様のご苦勞に心から感謝するとともに、私たちの心の泉ともなる本会の発展を心から祈っているものです。

夏合宿感想

南アルプス南下パーティー

- 掛布 あっという間の夏合宿だったけど、やっぱりリーダーは大変だった。
前川 ケガをしてみんなに迷惑をかけてしまった。
得田 縦走がほとんどできず残念だったけど、それだけに最初の方の日の山は格別でした。
長谷川 ヒンヤリとした針葉樹の林が幻想的でした。
森田 完全征服したかった。来年こそは・・・
(スイカが甲斐駒のピークで食べられたのが唯一の救いであつた)
岩崎 北岳に登れなかったのは残念だったけど、甲斐駒は本当に良かったです。もっと頂上で遊びたかった。

南アルプス北上パーティー

- 中野 途中で下山することになってしまったけど、とても楽しかった。
山崎 最後に良い経験をさせてもらいました。
河村 いろいろ疲れしました。でも楽しかったです。来年は完全征服したい。
田村 景色が素晴らしく、良かった。
谷本 山から富士山を眺めることができて良かった。
久保寺 農鳥小屋では大変でした。腰痛に苦労しましたが、体変良い経験になりました。今度は全部征服したいです。
笹田 途中下山になったのは残念だったが、景色の良い山々を見られて楽しかった。
津田 今回はケガの状態が思わしくなかったの、皆には迷惑をかけたと思います。

八ヶ岳パーティー

- 小川 下山したのは残念だが、蓼科山は晴れていて、八ヶ岳を一望できてとてもよかった。
高岩 蓼科山はきれいだった。
市山 良かったです。
佐藤 いろんな意味で厳しい山行でした。
青木 頭が痛く、体は動かなくて、みんなに迷惑かけました。
矢内 途中で下山したのが残念だった。

北アルプスパーティー

- 上田 薬師の頂上はとても寒かった。
村井 またもや途中下山。いろいろあったけど、良い夏合宿でした。
竹内 今考えるとリーダーの判断は正しく、勇気があったと思う。
林 自然の厳しさというものが良く分かった。
川俣 雨が多くて悲しかった。
志賀 テントの中につねに水がたまっていて、体がじめじめしてすごく気持ち悪かった。

行事報告

四万十川PW 8/20~24

L長谷川 SL上田 金吉 老田 中野 河村 佐藤

中央アルプスワンデイハイク 9/9~12

小西 上田 小川 得田

槍・奥穂高PW 9/4~6

L田村 SL金吉 西馬 吉原 市山

越後三山PW 10/2~5

L岩倉 SL小西 老田 川本 林

ワンデイハイク赤兎山 11/1~2

L小西 SL林 老田 川本 掛布 長谷川

冬合宿は経ヶ岳に決まりました。

CL中野、CSLは上田です。



ムササビ

編集後記

10月中旬、金沢では初めての地図展が名鉄デパートで開催されました。新建設大臣の視察に合わせ、国土地理院地図部長（前号にもご登場いただいた11期長岡先輩のこと）も来況。

余色立体地図のおねだり（この話はまた別の機会に）がらみで、4半世紀ぶりのデイト（?）。体験パソコンを1台占有して、白山の見える地域や、白山からの展望（例えば御前峰上空2kmなら富士山が見える）図他いろいろと表示していただきました。「白山眺望登山」のテーマで登攀調査に参加していた身には、意外な所からも見えていたり、それが鮮やかに表示されていくことに、ハアッ！。田舎者丸出して、さすが文明の利器と感激してしまいました。

あれから鷺走ヶ岳に登ってくる機会がありました。登って行く時の落葉の匂い、モズの囀り。爽やかな風の向こうに、きらめき輝く白山がありました。雲とみまごう雪煙も時々舞い上がっていました。

その2週間後も大門、赤摩木古山に登ってきました。すっかり葉を落とし明るくなった林からは、早々と犀奥の山々が垣間見え、後ろの猿ヶ山が刻々と姿を変えていくのも見ものでした。谷筋に新雪のなごりを残し、ぐっと名山ばく見える大笠に及。境川ダム湖からのフカバラの尾根を目でたどりながら、飲み干す格別の味のビール。

バーチャルリアリティの限界をはっきりと知りました。それはパソコンをまだもののできないこと―「できない」ということに今も負けん気がウズウズしてしまう私にとって、心安らく再確認でもありました。



OB会報「やまざと」 '97冬号

発行日	平成9年12月	金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会
発行者	大島 良治	事務局 金沢市橋場町10-49
編集責任者	舟田 節子	☎076-222-9288 舟田
印刷	プリントショップ多田（名倉 均 nagura @wnk.njk.co.jp）	